



JASWHS 公益社団法人 日本医療社会福祉協会
Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 27 年 1 月 30 日 第 4 巻 (第 7 号)

発行：東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル 2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

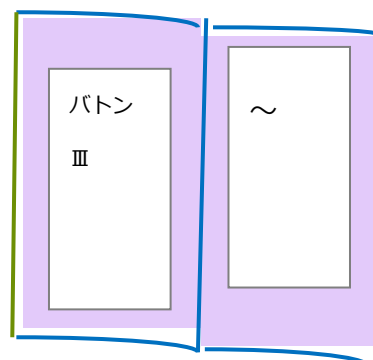
1. 現地活動報告
2. MSW 勉強会（グループスーパービジョン）に参加して
3. 第 4 回 東京都医療社会事業協会と宮城県医療社会事業協会との交流会
4. 災害支援チームからのお知らせ
5. 災害支援ニュース発行のお知らせ
6. あとがき

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ」
の発行日が決定しました。

2015 年 2 月 9 日

ついに発行されます。

もう少しお待ちください！！



「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ」 発売中！！

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ」 発売中！！

詳細は“3. 災害支援チームからのお知らせ”をご参照ください。

1. 現地活動報告

協力員 小西 知世氏

KKR北陸病院（石川県）

活動期間：2014/12/3～12/5

震災から3年半以上が経過し、今では東日本大震災についてテレビで放送されることもめっきり少なくなった。しかし今も、石巻市だけで2万人以上の方が仮設住宅（みなし仮設も含む）で生活している現状を知り、驚いた。また現在、震災により家を失い、自力での住宅再建ができない人のために、復興公営住宅という公的な賃貸住宅の建設が至る所で進んでおり、これからまた新しい街ができていくことを実感させられた。それと同時に、流された家の土台がまだ残っていたりして、住民の方はこれまでの街を失ったことに加えて、新しい街で暮らしていくことの両方を受け入れていかなければならないのだと感じた。

活動中の三日間は、フィールドワークの時間をたくさんとっていただいたため、自分の目で街の様子を見て、その空気を感じることができた。他にも、現地の支援員の方が継続的にかかわっておられる方を一緒に訪問させていただいたり、復興公営住宅の入居説明会で、支援員からの連絡を求めて来られた方へ電話をかけさせてもらった。

街全体としては復興に向けて動いており、町を歩く方の様子を見ても、震災前の生活を取り戻しているかのように見えた。しかし、実際に家を訪問すると、もともと家族間の問

題・貧困・介護の問題などを抱えていた方で、震災によってさらに問題が複雑化しているケースもあり、現地での継続的な支援が、今もまだ必要なのだと実感した。

今回、震災後はじめて現地に行くことができ、自分の目や耳で街の様子を見、被災者の方々の生の声を聞いたことが何よりの収穫だった。今回見聞きしたことを忘れず、これからも災害支援について関心を持ち続けることが大切だと思った。

メッセージ

出発前は、災害支援の経験もない私に何ができるだろうという不安がありましたが、現地の支援員の方からも今の石巻の状況を丁寧に教えていただき、現状をある程度理解した上で、前向きな気持ちで取り組むことができました。私が活動したのは三日間だけですが、震災から少し時間がたった今だからこそ、続けて支援をしていくことの大切さを感じました。この先復興が進んでも、石巻は“これから”の街なのだと思います。いつ行っても遅すぎるということはないのだなと感じました。

☆☆

協力員 長谷川 敦氏

仙台循環器病センター（宮城県）

活動期間：2014/12/17

男のあそぼう会 午前

参加者と暖房器具購入設置支援 午後

お世話様です。東北 長谷川でございます。
今回は、ご報告が大変遅くなり申し訳ありません。協会ニュース・生保研修等の受け入れ
同時進行で遅くなりました。

午前の活動は、県協会いつもの 2 名で伺

い、もう定番となりました。参加者の中で寒い時期にもかかわらず暖房器具の不具合の訴えがあり、会終了後参加者とともにホームセンターへ行き暖房器具購入の支援をしております。なかなか制度上に乗りにくいかたの支援としては、当会の機動力の良さをあらためて感じるこができた 1 日でした

☆☆

協力員 鷹合 いつか氏

KKR北陸病院（石川県）

活動期間：2014/12/3～12/5

12 月 3 日～5 日までの 3 日間、石巻へ災害協力員として訪問した。最初に訪ねたのは大橋団地の仮設住宅だった。初めて見る仮設住宅は想像以上に多く立ち並んでおり、「まだこんなにたくさんの方が仮設住宅で生活をしているのか…」と、とても悲しい気持ちになった。しかし、そこで被災者の方から初めて生の声を聞いたときは、自分が思っていたよりも当時のことを素直に話してくれたことに驚いた。「数日間連絡がとれなかった家族と会えたときは嬉しかった」、「津波が来る前、水がどんどん引いていき、川の底が見えた」など、思い出すことも辛いと思う話を、どんどん話してくれる。その後、現地

の MSW と同行して訪ねた被災者の方も、県外から来た私たちに対し時間をかけて当時の話をしてくれ、「津波が来たときのこと、今の現状を帰ってから伝えてほしい」という気持ちをもっておられるのがひしひしと伝わってきた。

津波がきた現場へも訪問した。今は建物があったかもわからないくらいに整備されていたり、草が生えている場所もあったが、昔の写真をみると震災後に街がなくなったということがわかる。災害から身を守るための防波堤。しかしその防波堤があったために状況がわからず逃げ遅れた大川小の子供たち。防波堤がなく海の状況は見えるが海面と陸

の高さが少なく逃げる事ができなかった雄勝の方々など、それぞれの地域ごとに条件は異なるが、今回の津波は高さのある堤防をも超えた巨大な津波。現地に来ることでその恐ろしさを少しでも体感できたのと同時に、自分の生活している場所で何ができるのかを考えさせられた機会になった。

復興公営住宅が次々と立ち並んでいく中、新たな課題がでてきている現状もあり、メディアでは取り上げられることも少なくなっているが、被災地の復興はまだまだこれからだということを思い知らされた。

メッセージ

テレビで報道されることが少なくなり、現状もわからず、「自分が行って何ができるだろう」と考えてしまうかもしれないが、「何かをしよう」ということを考えすぎず、「現地を知る」ことから始めることも、大切な支援の一つだと思います。



復興公営住宅

2. MSW 勉強会（グループスーパービジョン）に参加して

石巻現地担当 松川 夏実

平成24年11月から石巻圏域ソーシャルワーク勉強会を開催した。石巻圏域のソーシャ

ルワーカーのネットワークづくり、そして各々の抱えるジレンマやスキルアップのために年 4 回事例検討会を行ってきた。今回 12 月 9 日の勉強会では、当協会の西田知佳子氏によるライブスーパービジョンを行った。参加者は 21 名。本人の意向が確認できないなかで、家族が退院後の生活を決断することの難しさや、それに寄り添うソーシャルワーカーの誠実さが感じられる事例であった。事例の経過をたどる中で、その時々 MSW は何を思ったのか、どうして不安全感が残ったのか…。また、家族がソーシャルワーカーとの面談に対し消極的であった場合の関わり方等、スーパーバイズを受ける中で参加した MSW それぞれが事例を通して、共感し理解を深める機会となった。最後に、事例提供者は「本人がどのように生きてきたのか？どのように生きていきたいか？考えることの必要性を感じた」と話されていた。

今回初めの試みであったライブスーパービジョンについてのアンケートでは、①企画に参加して“良かった”と答えたのが 82% ②内容について“良かった”と答えたのが 82% ③今後、日常業務を行う中でのスーパーバイズの必要性については 100%が“必要である”と回答した。必要性を感じる理由として「ソーシャルワーカーとして必須である。」「自分の中で、これが正しいと決めつけているものが、別の視点で見ると違っていたり、気づける機会がなく困難ケースにおいても相談できたら心強い。」「自己肯定感が得られた。」等があげられた。

ソーシャルワークを行う中で、クライアントや家族にどのように寄り添えばいいのか悩み、そして関わる中で感じ、ジレンマや不安全感を抱えることも少なくない。誰もが抱えるこの感覚を大切にしながら、石巻圏域に根付く勉強会を継続していきたいと思う。



3. 第 4 回 東京都医療社会事業協会と宮城県医療社会事業協会との交流会

語り継ぐこと 感じる事

東京都医療社会事業協会 武山ゆかり

震災の年の暮れ、第 1 回の交流会では、被災医療の拠点となった「石巻赤十字病院」MSW の発災直後の日々と救援物資を障害者施設や住民に届けて回った宮城県協会員の記録映像の報告。また参加した県会員それぞれからその日の事をお聞きした。フィールドワークは津波に孤立した病院、燃えた学校、

まだ壊れた家の続く石巻市内をめぐる。2 回目は災害後の呼吸器疾患とアスベスト問題の学術研修とマスク装着、アスベスト使用建物を知る実地研修。第 3 回目は入院患者ごと波にのまれた病院がある石巻市雄勝地区、高台移転と住宅再建の現場。第 4 回目の 26 年 11 月 29 日～30 日は、仙台市か

ら南、福島に隣接する亘理郡へ、民話にある災害の語り部さんの話と、浜の消防団の方たちの語り。そして海岸から 238 メートルの近さに有りながら、迅速な避難で一人の犠牲者も出さなかった特養・高齢者施設への訪問など等。

「忘れないで下さいね、また来年も宮城県の様子を見に来て下さい。」と言われて続けてきた交流とフィールドワークです。毎回、ここへ来なければ知り得なかった、その日のすさまじい自然の力と犠牲になった人の命、失った生活の大きさを肌に感じ、その緊張を日常業務を見直すことに向けてきた 4 年間でした。

今回は、NHKのDVDや、語り部の会の冊子にもなった庄司アイさんの臨場感あふれる津波による漂流の話の後その場を歩くという経験。それを翌朝やっと見つけに行くことが出来た息子、中学生の娘の父親としての思い。それが私たちと同じ様に病院で、多くの患者の命を思って動かなければならないMSWの仲間であり、県協会の会長であった事実。発災十数日後に見舞った時の庄司会長の、まだ張り詰めた硬い表情を今でも思い出します。

海辺の小学校も、特養や高齢者の施設も、一人の犠牲者も出さずに避難できたという事実、昨年献花した石巻市大川小学校の

70 人の子どもたちと無念の父親の語られた怒りが胸に渦巻きます。すべてが流された港の復興をかけて「名物はらこめし」やわたり力二を売る市場や、塩の上がった田畑から復興資金で「イチゴ団地」をつくり、生活再建にかける壮年の消防団員たち。被災直後は遺体搜索の毎日だった経験をも語って下さいました。しかし、多くの「二重ローン」や家をどこに建てるかなど、まだまだ語り尽くせぬほどある尽きぬ悩みを、巨大堤防の上や、沈下した耕作地の延々と続く道を走りながら聞きます。

仮設住宅から復興住宅や、新しい職場に移り、仙台近郊へと転出する家族が相次ぎ、残る単身者が焦り始めているとの話。同行した石巻の現地担当者は、その格差に言葉を呑み、前途を思い巡らせます。行かなければ聞けない話、知ることの無かった現実や経済事情に、驚きの連続の旅でした。

まだ続けるんですか？と聞かれる被災県との「交流会」です。それは、もちろん被災地で働くMSWの痛みを共感し励ましを伝える機会ではありますが、まさしく参加者が日常を考え、生き方を見つめ直す、明日の自分のための旅でもあると毎回実感します。福島県協会との交流会、宮城県協会との交流会、近県協会との交流とこれからも続けることの意味は大きいのです。

交流会に参加して

石巻現地責任者 畑中 良子

(26 年度現地担当 3 名は宮城県協会に加入)

今回、11 月 30 日に初めて県南の地域を訪問した。普段は石巻市で活動をしており、近

隣の市町村へは行くが、少し離れた地域には行く機会がなかったので、学びや気付きがあ

った。

特別養護老人ホーム（赤井江マリンホーム）の鈴木事務長からのお話の中で特に印象深かったのは、訓練の時に職種別で持って逃げる物（相談員はケース記録）を決めていた、という事であった。避難訓練ではどのように逃げるのか？については検討するのは当たり前だが、誰が何を持って逃げるか？まで決めていたからこそ、今回のスムーズな避難にも繋がったのだと感じた。

庄司アイさんのお話からは、昔から伝わる民話の意味、伝え続ける事の大切さを学んだ。

亘理町のキクチさん、アオタさん、シシドさんのお話からはまさにそこに住んでおられる住民の声が聴けた。震災前の地域から離れたくない気持ち、今後の生活をイメージ

していく中で、家族との葛藤、行政が進めていく地域づくりと自分たちが必要と思う地域づくりの差、ハード面の復興と比例しないソフト面（精神面）での復興等々、これは石巻市の住民さんのみなさんも感じている事だと思った。災害危険地区の指定を受け、地域住民が減少していく中で、地域活性を行っていく難しさなどが話より伝わってきた。

『「津波がなかったら。」という思いは捨てきれない。』『心がいつ穏やかになれるんだろう』という言葉はこの被災された地域の住民のみなさんの誰しもが感じている事だろう。そんな思いを抱えながら生きているという事を心に留めながら、今後も石巻市で活動を継続していこうと思う。



4. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 協力員募集】

現 地

現在、1日にあたり上限2から3名で募集しております。

現地までの旅費・交通費は自己負担をお願い致します。

活動日程につきましては下記のようにお願い致します。

期 間： 平日3日以上、

受入日： 期間を満たす曜日（土、日、祝日は活動致しません。）

但し、上記以外であれば支援活動が可能な場合は現地担当までご相談ください。

※ 出発2日前までには（到着時刻等を含めて）は必ず現地担当にご連絡ください。

今後、活動に参加される方でその年度初回参加時には、簡単な資料を郵送致します。ホームページに活動カレンダーを掲載しておりますのでご覧下さい。

事 務 所

引き続き募集しております。

平日のみの活動ですが1～2ヶ月に1回でも構いません。

ご協力お願い致します。

【2. 災害支援チーム会議開催のお知らせ】

2月1日（日）13：00～15：00 於：協会事務所

【3. 書籍販売】

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』と
『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』の

販売を行っています！

発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅡ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。



※ご注文は注文用紙で承ります。

(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

バトンⅠ：URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

バトンⅡ：URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47

【4.facebook】



facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしく願いいたします。

URL

<http://ja-jp.facebook.com/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部/156327867812970>

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。

URL

<http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be>



5. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回発行予定 2 下旬予定

.....

6. あとがき

災害支援チーム事務局から

担当 冨永

石巻から東京に拠点を移して、もうすぐ1年になります。こちらでの生活に追われる日々に・・・厳しくも美しい石巻の風景を思い出します。北上川や雄勝の海辺は、多くのことを語りかけてくれます。忘れないこと、語り継ぐこと、新しいまちづくりに私たちができることを少しでも継続できることが大切なことだと思います。

東日本大震災 MSW 災害支援ニュース
平成 27 年 1 月 30 日第 4 巻（第 7 号）
作成 日本医療社会福祉協会
災害支援チーム事務局